



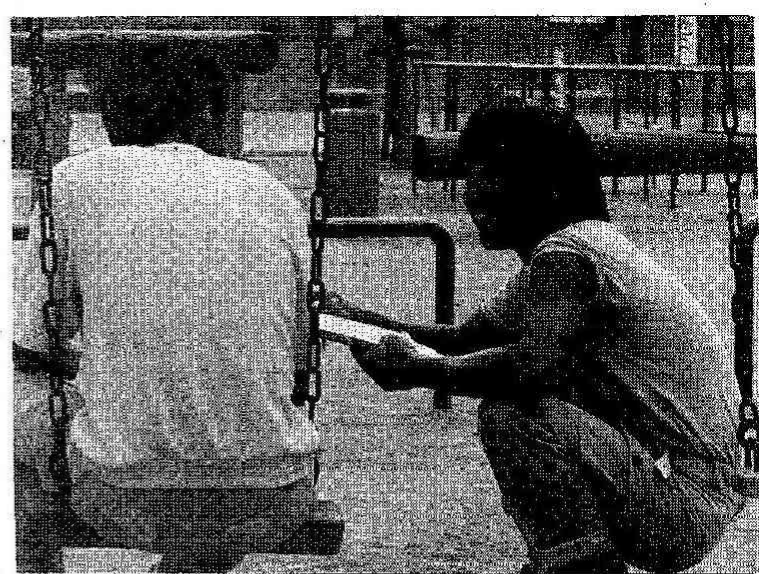
地域・子ども・大人

釜ヶ崎に住む子どもたちは、自分の生活圏である釜ヶ崎に対してどんな意見ないしは感じを持っているだろうか。アンケート調査の「地域の項」(B問1~問13)を中心に整理してみたい。ここでは、とくに釜ヶ崎の子どもたちに焦点を絞った関係

上、さきに紹介した分類01とそれ以外を比較することにする。参考までにあらためて、その人数をここにかけろ。

01グループ(以下Aとする) 68人

01以外 (以下Bとする) 157人



(1) 釜ヶ崎の子どもたちは釜ヶ崎が好きなのだろうか

グループ別	この街が好き	この街が嫌い
A	44.1%	33.8%
B	61.1%	18.9%
平均	54.0%	23.5%

註(一) この問に関して「この街」の場合、Aグループは釜ヶ崎、Bグループは、自分たちの住んでいる街をさすものと理解してアンケートを整理した。

註(二) 以下で使用する平均は、調査人数全体=225人の平均である。

釜ヶ崎の子どもたちは、好き、嫌い共に他地区の子どもたちよりもマイナスのイメージを自分たちの街に対して持っている。しかし、こと釜ヶ崎について言えば、釜ヶ崎の好きな子どもたちは、嫌いな子どもたちよりも、約10%強、好感を持っていることがわかる。

この好き嫌いの感じには、何が原因なのだろうか。まず年齢別に分析してみると次の通りである。(注68人中、好き、嫌いのアンケートに答えたのは、好き30人、嫌い23人。あとはノーアンサー(NA)・不明18人である)

年齢構成

年齢	幼児	小学生	中学生	青年	計
好人数	2	15 ◎9 ①6	6	7	30
嫌人数	4	15 ◎6 ①9	2	2	23

注：◎=萩之茶屋小学校 ①=今宮小学校

年齢構成から言えば、好きな子どもたちは比較的高い年齢層に多い。反対に嫌いな子どもは、低年齢に集まっている傾向がある。

好きな理由、嫌いな理由

好きな理由について、理由なしが14人(47%)と最も多く、以下友だちが多い7人(23%)、おもろいから…4人、ここに住んでいるから4人、住みやすいから1人の順になっている。特別の理由もないが、友だちが多いことは注目に値するし、住めば都式の答えも案外多い。

それに対して、嫌いと答えた子どもたちの理由ははっきりしている。くさい、汚いが、12人と全体の50%以上あり、以下変なおっちゃんがいる5人、酔っぱらい3人、その他3人となっている。変なおっちゃん、酔っぱらいとく

さい、汚ないとを合計すると実に23人中20人(87%)が、労働者(とくに失業中=アブレの労働者がいる)との関係を、釜ヶ崎が嫌いな理由にあげている。さきほど指摘したように低年齢層の子どもたちが、現象から釜ヶ崎を見ていることがよく反映している。

しかし、釜ヶ崎が好きだと言った子どもたちにしても、釜ヶ崎がいまままで決して良いとは言っていない。かれらの希望は次の通りである。

酔っぱらいや失業者などがない街であってほしい(7人)し、きれいな街であってほしい(4人)ことは当然である。公園がほしい(2人)というのは、後にものべるが、釜ヶ崎には児童公園が四ヶ所もあるが子どもたちは自由に使えないことの証拠であり、遊ぶところがほしい(1人)と同様、子どもの素直な意見であろう。他に、バクチのない街(1人)との回答は日常的に路上バクチによって、自分たちの遊びが邪魔されていることへの抗議ともとれる。

しかし、子どもの多い町(1人)、みんな平等の街(1人)やさしい人のいる街(1人)などは、子どもたちなりに直感的にとらえている結果である。ただ、2人が、「このままでいい」と答えている。その2人は青年たちで、すこし

斜めにかまえた回答と読むべきではないか。これは、簡単に行きませんよという意見とも読みとれる。

(2) 子どもと労働者との交流

釜ヶ崎では、日雇労働者、しかも単身の男子労働者が居住者の大半をしめる。(大人用アンケートの項参照)子どもたちは、外に出て遊ぶときや応なしに大人(労働者)と交流を持たざるをえない。その証拠に、地域で知っているおじさんのいる子どもたちは、Bグループに比較して高いと言える。

(a) 地域で知っているおじさん

	A	B
知っているおじさんがいる	50.0%	36.8%
知っているおじさんがいない	43.6%	53.2%

子どもたちは、必ずしもプラスのイメージだけで大人と交流しているわけではない。マイナスの評価をしながら、大人を見、また交流していることが、次の表(b)(c)(d)から理解できる。

(b) おじさんはこわい……

	A	B	平均
こわいと思う	51.5%	33.0%	37.3%
こわいと思わない	33.8%	66.4%	52.9%

(c) おじさんにおこられた……

表2-(c)	A	B	C
おこられたことがある	64.7%	31.8%	39.6%
おこられたことがない	32.4%	66.9%	54.2%

釜ヶ崎の子どもは、おじさんにおこられたり、こわいと思ったりするマイナスのイメージを半数以上がもっている。これはBグループに比較して約2倍以上である。また、おこられたことがない。こわくないと回答した子どもたちも、Bグループに比べると約半分、この対比はきわだっている。大人に対するマイナスのイメージが大きい。それはどんな大人(労働者)かは、別項で検討する。

(d) おじさんをおちよくる

子どもたちは、おじさん達をおちよくっている。弱い者に対しては攻撃的ですからある。おちよくりも、口でからかうというたあいなものから、暴力的なものまで段階もいろいろである。

表2-(d)	A	B	平均
おちよくったことがある	48.5%	33.6%	36%
おちよくったことがない	42.5%	55.9%	55%

釜ヶ崎の子どもは、その約半数がおちよくったことがあると答えている。その結果が、「おこられた」「こわいと思った」につながっている。おちよくることをプラスの面から考えると、大人に子どもが積極的にかかわっているとも評価できる。しかし、次のような暴力的な事例を見る限りプラスとは評価できない。しかし、その場合でも、これが、子どもたちが青年になってからの体験でなく、小中学生時代の体験であることを知るとき、成長し、大人を理解するとき、そんな暴力的なこともしなくなるのがわかる。

酒を飲んでいるおじさんが話しかけてきて変

なことを言ったので蹴った(中1・2)。寝ている時、10円のロケット花火を尻に向けて飛ばした(青年17歳)。すべり台の上からオロナミンのびんを、下にいるおっちゃんにころがした(青年16歳)、道を聞いてきたので思いきり殴った(青年17歳)などから、「つばをかけた」(小2)、「たたいた」(小2)とともに口でおちよくったのがほとんどである。

ただ、このおちよくりも釜ヶ崎が好きか嫌いかを一つの物差しにして整理してみると、一つの傾向を見ることが出来る。

		幼	小	中	青	NA
おちよくったこと	好	2	5	3	5	1
	嫌	1	9	0	1	0
おちよくったこと	好	0	10	2	2	0
	嫌	2	6	1	1	2

ここで注目すべきは、釜ヶ崎の嫌いな小学生たちは、好きな小学生の二倍もおっちゃんたちをおちよくっていることである。中学生ではほぼ同数。青年たちの場合、好きなものが多くなっているが、これは小中学生時代の経験であることが、調査の聞きとりの過程で確かめられている。青年になってからは、おちよくったことがない。

(3) 子どもたちは大人をどうみているか

前項で、子どもたちの一定の傾向を把握できたが、もっと具体的なことで子どもたちの反応をきいてみたのが次の表(a)(b)である。

(a) 大人はどんな仕事をしているか

ここで言う大人とは、子どもたちが釜ヶ崎で交流している大人(労働者)しかも、失業中の

労働者である。

子どもたちには、かれらが働いている姿は見えない。むしろ、周辺部の子どもたちが、廃品回収などの仕事をしているのを知っている。

表3-(a)	A	B	平均
仕事を知っている	25.0%	30.6%	28.9%
仕事を知らない	67.6%	59.3%	64.5%

釜ヶ崎の子どもたちは、労働者と日常的に接しているが、その労働者は、休みであったり、失業中であったりする。したがって、労働現場の労働者に釜ヶ崎の子どもたちがほとんど接することがないのは、表(b)の「働いているのを見たことがあるか」によくあらわれている。

(b) 働いているところを見たことがあるか

▼公園で寝ているおじさんたちをどう思うか

表4	好き	嫌い	計
かわいそう	7	2	9
邪魔	4	2	6
他所に行ってほしい	3		3
なんとも思わない	5	3	8
しゃーない	2		2
なぐったろーか	1		1
こわい	1		1
自分が悪い	1		1
乞食	1		1
わからない	1	2	3
いいと思う		1	1
いやだ、汚ない	2	4	6
あかん		1	1
遊びにくい		2	2
なんでこんなことするの		1	1
ひまだなー		1	1
家のこと考えている		1	1
N.A.	2	3	5

表3-(b)	A	B	平均
見たことがある	26.5%	21.3%	23.1%
見たことがない	60.3%	73.9%	64.5%

大人の労働について理解を示し、働いているところを見たことがあると回答したのは、青年たちで、小中学生は全く知らないと言っても過言ではない。

青年たちの労働への理解は、かれら自身の労働体験に基くものである。

仕事の内容として、土方、日雇、とびなどと回答した青年たち(16歳、17歳)は、いずれも日雇労働を体験している。その結果としてバラシ、鉄筋、トビ、塗装などを見たことがあるとあげている。

(4) 失業中の労働者

(3)の(a)(b)表の示すように子どもたちは、働く労働者を全くと言っていいほど知らない。かれらが、一般に大人というとき、そこでイメージされるのは、失業で公園にいる労働者である。子どもたちの反応は多岐にわたるが、ある一定の傾向は読みとれる。

左の表(4)は、日中から公園にいる大人に対する子どもたちの目である。

釜ヶ崎の好きな子どもたちには、公園で寝る大人に対して「かわいそう」(7人)、なんとも思わない(5人)という一方では、「邪魔、他に行ってほしい、いやだ、汚ない」(9人)とも言う。

しかし反対に、嫌いな子どもたちは、かれらに対して「きたない、遊びにくい、邪魔だ」など否定的な子どもたちが8人いる。これは一つの対象的な見方と言えよう。さらにこの傾向は、酒を飲む労働者(大人)に対する意見としてもっとはっきり出てくる。

(5) 酒を飲む労働者

子どもたちの回答を整理すると下の表の通りである。

子どもたちの見方は、釜ヶ崎の好き嫌いにかかわらずほぼ一定している。強いてあげれば、嫌いな子が、「飲んでいるおじさんたちは嫌いだ」(7人)というのが、目立つ意見である。しかし、一般的に点はからく、「あまり飲むなよ」とか「いいと思うよ」といったものは例外といえよう。子どもたちは、なぜおじさんたちが酒を飲むのかまでは理解できないからだ。中には、「精神病院へ行けばいい」という極論さえあったことは、紹介しておく。子どもたちはこの知識を誰から手に入れたのか。

(6) 鍵のかかった公園

釜ヶ崎にある鍵のかかった金網に囲まれた公園を、子どもたちはどう見ているだろうか。

表	A	B	平均
遊んだことがある	60.3%	40.1%	48.4%
遊んだことがない	35.3%	46.0%	39.6%

このような結果は、釜ヶ崎以外には金網で囲まれ施錠された公園がほとんど存在しないことを証明している。釜ヶ崎の子どもたちは、公園で遊ぶとすれば、金網と鍵の公園(花園萩之茶屋北、中)である。Bグループの子どもたちが、鍵のかかった公園で遊んでいるのが思ったより



▼お酒を飲んでるおじさん、どう思うか。

表5	好き	嫌い	計
知らん	4	1	5
こわい	3		3
どうも思わん	3	1	4
嫌いだ	2	7	9
邪魔だ	2		2
うっとうしい	2	2	4
好きだから飲んでいる	2		2
くさい	2	3	5
あかんと思う	2		2
ケガさせられる	1		1
あほ	1		1
どっかへ行ってほしい	1	2	3
いいと思う	1		1
金の無駄使い	1		1
あまり飲むな		1	1
人の勝手だ		1	1
しょうない		1	1
N. A.	3	4	7

高いパーセントなのは意外に思うかも知れない。しかし、その要因が、同じく鍵のかかった花園北公園で遊ぶ(81.3%)花園北地域の子どもたちにあるとすれば、納得できよう。その証拠に、Bグループの中でも05グループの子どもたちは81.8%まで鍵のかかった公園で遊んだ経験など持ち合せない。公園での遊びにも釜ヶ崎の子どもたちの特色がある。

あそびと子どもたち



[1] 今、どんな遊びをしているの

子どもたちの成長過程で、食物から身体に必要な栄養を吸収するのと同様に、あそびを通して人や自然・科学と関わりを持ち、その関わりの中から心の豊かさを養っている。子どもにとって、あそびは、生活の中で重要な部分を占めている。今、子どもたちは、どんなあそびに興

— 表 1 —

あそび	A		B	
	人数	%	人数	%
ファミコン	13	21.3	34	25.4
遊具 [注1]	9	14.8	13	9.7
サッカー	6	9.8	4	3.0
野球	4	6.6	16	11.9
TVゲーム	3	4.9	16	"
ごっこあそび [注2]	3	"	13	9.7
卓球	3	"	6	4.5
マージャン	3	"	1	0.8
プロレス	3	"	0	0
プール	3	"	1	0.8
花火	3	"	0	0
テレビ	2	3.3	1	0.8
カブ(トランプ)	2	"	5	3.7
ドッチボール	1	1.6	4	3.0
ダベリング	1	"	3	2.2
自転車	1	"	2	1.5
本	1	"	0	0
せみとり	0	0	3	2.2
その他 [注3]	0	0	12	9.0
合計	61		134	

[注1] 遊具あそび=なわとび・おもちゃ・ケン玉・ベッタン・野球あそび・ゴム銃・スケボー・ローラースケート・ラジコン・鉄棒・ブランコ・ゴムとび・ブロック・つみき・オセロ等。

[注2] ごっこあそび=探偵・石蹴り・坂おに・死神ゲーム・たかたか・飛行機ごっこ・でんつき・鬼ごっこ・かくれんぼ・じゃんけんゲーム等。

[注3] その他=魚とり・ゴルフ・単車・競場・たばこ・クラブ・ぶらつく・シンナー・パチンコ・おっさんをからかって金をもらう・友だちと服を見にいく、各1名。

味を持ち、夢中になっているのかを聞いた。

(注) 前項と同じく、01グループをA

01以外のグループをBとする。

一番人気のあるあそびはファミコンで、Aは21.3% Bは25.4%である。Aでは、遊具14.8%、サッカー9.8%、野球6.6%、TVゲーム4.9%と続く。Bでは、野球・TVゲームでそれぞれ11.9%、遊具・ごっこあそびがそれぞれ9.7%と続いている。

ファミコン・野球・サッカーの年齢構成は、次の表2の通りである。

	ファミコン		野 球		サ ッ カ ー	
	A	B	A	B	A	B
幼 児	1	0	0	0	1	0
小学低学年	5	4	0	4	1	1
小学高学年	3	18	3	8	2	2
中 学 生	3	10	1	3	2	0
青 年	1	2	0	1	0	1
合 計	13	34	4	16	6	4

ファミコンであそぶ年齢層が、Aは小学生低学年に多く、Bでは小学生高学年・中学年に多く見られる。

	A		B	
子ども会	11	16.2	24	15.3
公園・路上	31	45.6	56	33.7
ゲームセンター	26	38.2	77	49.0
合 計	68		157	

また、表3は、この実態調査の聞き取り場所と子どもの数を示したものであるが、これによると、実際ゲームセンターであそんでいた子が全体の46.7%もいる。しかし、C〔I〕の問に対して、TVゲームであそぶと答えた子が、Aでわずか4.9%、Bで11.9%であった。これは、子どもがゲームセンターと自主的あそびとを区別しているからであろうか。それとも、

ゲームセンターであそぶことを学校の先生や親から禁止されているから言えなかったのであろうか。事実、実態調査の当日、調査中にもかかわらず、萩之茶屋小学校の先生が10人程の集団でゲームセンターを見回っていたし、調査することを、ゲームセンターの店主が子どもたちに知らせ、こない様にと話していた。いつもいるはずの子がいなかったり、この調査の数より実際はもっと多くの子が、ゲームセンターであそんでいるのが実状である。

	A		B	
スポーツ類	20	32.8	34	25.4
ゲーム類	21	34.4	58	43.3
ごっこ・遊具類	12	19.7	26	19.4
その他	8	13.1	16	11.9
合 計	61		134	

表4は、あそびをスポーツ類とゲーム類とごっこあそびとその他に大別し、両者を比較してみた。ごっこ・遊具あそびとその他のあそびがAとBほぼ同値であるが、スポーツとゲームに大きな差が見られる。Aでは、スポーツとゲームの差がわずか1.6%であるが、Bでは17.9%ものひらきがある。このひらきの理由をさぐる為に、この実態調査の聞き取り場所—表3—を再度参考にした。

Bに住む子どもたちの約半数がゲームセンターであそんでいたことがわかる。特にBの05の地域に住む30人の内、労働福祉センターの下で1名、路上で2名、こども会で1名の4名を除く26名の子どもが、ゲームセンターにいた。この26名が通っている学校は、松の宮小学校(2人)・栄小学校(2人)・平野六反小学校(4人)・長吉六反小学校・丸山小学校・佃小学校・用和小学校・東羽衣小学校・愛日小学校・松山の小学校(各1人)・松虫中学(2人)・山直中学・大正西中学・木津中学・船場

中学・鶴橋中学校(各1人)・阿倍野高校(3人)・阪南高校・四天王寺高校・鳥飼高校(各1人)と20校にも及んでいる。このことは、調査した地域からかなり離れた地域に住む子どもたちが、わざわざ釜ヶ崎地区内及びその周辺のゲームセンターにあそびに来ていることを示している。この中には、以前釜ヶ崎に住んでいた子もいる。何かの理由で、自分達の地域内であそぶことの出来ない子どもが、何かを求めて釜ヶ崎にやって来ているのである。釜ヶ崎は、そんな子どもたちも受け入れること出来る街のようである。そして、それはまた、釜ヶ崎にこのような子どもたちを受け入れることの出来る場、ゲームセンターに変わる場が必要であることを示している。

〔2〕「主にどこであそぶの」

子どもたちは、どこであそんでいるのだろうか。表5が、そのアンケート結果である。

あそび場所	A		B	
	人数	%	人数	%
友だちの家	23	17.7	55	21.2
子ども会〔注〕	36	27.7	43	16.5
公園	18	13.9	54	20.8
自分の家	13	10.0	49	18.9
ゲームセンター	23	17.7	34	13.1
路上	12	9.2	22	8.5
その他	5	3.8	3	
合 計	130		260	

〔注〕子ども会とは①こどもの家
②山王こどもセンター
③市民館
④こどもの里の4ヶ所

表6は、表5を参考に利用度の多いあそび場から順に並べたものである。ABを比較して

ると、利用場所が逆転していると言えるのではないだろうか。Aで多い子ども会、ゲームセンターが、Bでは少ない方に、Bで多い友だちの家・公園・自分の家が、Aでは少ない方に並んでいる。

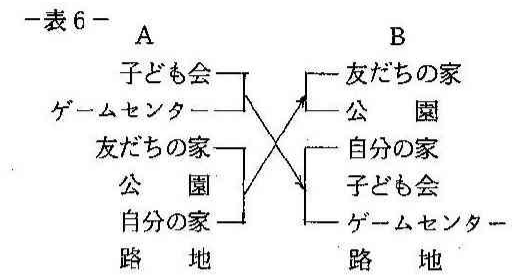
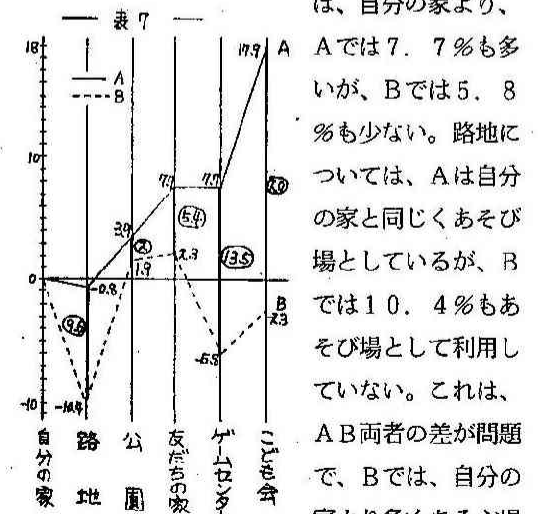


表7は、自分の家を0とし、他のあそび場との差を示したものである。Aでは、子ども会各施設を利用している子どもが27.7%と最も多く、自分の家では10%しかあそんでいない。その差は17.7%もある。Bでは、子ども会16.5% 自分の家18.9%と、その差わずか2.3%にすぎない。しかも、子ども会の方が利用度が少ない。そして、ABの差は20%となる。ゲームセンターをあそび場とする子は、自分の家より、Aでは7.7%も多いが、Bでは5.8%も少ない。路地については、Aは自分の家と同じくあそび場としているが、Bでは10.4%もあそび場として利用していない。これは、AB両者の差が問題で、Bでは、自分の家より多くあそぶ場



は、友だちの家+2.3%と公園+1.9%で、子ども会各施設やゲームセンター・路地をあそ

び場としなくても良いということである。反対に、Aでは、子ども会各施設・ゲームセンターや友だちの家をあそび場としなくてはならない状況にあることを示している。そして、公園については、自分の家と同じように利用出来ない場、子どもたちの場がないことの証明である。

これはまた、生活の項〔I〕でみてきたように、住居の広さが、AはBより一問づつ狭いこと、言い換えれば、家に自分の為の場がないことを証明している。

あそび場を利用する年齢構成を示したのが、表8である。

—表8—

	幼 児		小学低学年		小学高学年		中 学 生		青 年	
	A %	B %	A %	B %	A %	B %	A %	B %	A %	B %
友だちの家	8.3	8.3	17.5	11.5	12.5	22.5	31.6	25.3	21.1	25.0
こども会	25.0	16.7	32.5	16.7	32.5	19.8	15.8	13.3	21.1	10.0
公 園	25.0	25.0	10.0	31.0	22.5	27.0	5.3	9.3	5.3	5.0
自 分 の 家	8.3	33.3	10.0	14.3	10.0	19.8	5.3	17.3	15.8	20.0
ゲームセンター	25.0	8.3	15.0	14.3	10.0	3.6	15.8	21.3	36.8	35.0
路 地	8.3	8.3	7.5	11.9	10.0	6.3	21.1	10.7	0	5.0
そ の 他	0	0	7.5	0	2.5	0.9	5.3	2.7	0	0

幼児をみると、Bでは、33.3%自分の家であそんでいるが、Aでは8.3%で、公園・子ども会・ゲームセンターでそれぞれ25%もあそんでいることがわかる。小学生では低学年・高学年共、一番多くあそぶ場が、Bでは公園で、平均28.1%であるが、Aでは平均16.3%にすぎない。Bの公園に相当するあそび場が、Aでは子ども会で、平均32.5%なのである。Bの子ども会利用平均値は、18.8%である。自分の家であそぶ子は、Aは平均10%、Bは平均18.3%、ゲームセンターをあそび場とする子は、Aでは平均12.5%、Bでは6.5%で、Bは自分の家であそぶことが出来、Aは自分の家の代わりに、ゲームセンターを利用していることがわかる。中学生になると、A・B両地域とも、友だちの家をあそび場としている。しかしここでも大きな差は、自分の家での自分の場で、Aが5.3%に比べ、Bは17.3%と、12.0%もBが多い。かわりに、路地を利用する子どもは、Aが2.1%もあり、Bは10.7%だけである。

—表9—

	A	B
1	ゲームセンター	ゲームセンター
2	友だちの家 こども会	
3	自 分 の 家	自 分 の 家
4	公 園	こども会
5		公園・路地

15才以上の青年の利用順は、表9に見られる様に、AB共にゲームセンターが一番のあそび場としている。友だちの家や自分の家・公園でのあそび場はほぼ同じであるが、子ども会を利用する青年が、AではBより11.1%も多い。これは、Aに、中学を卒業し、又特に、卒業してすぐに働いている青年にとって、子ども会をあそび場としなければならないことを示しており、彼等の為の特別な「若衆宿」のような存在の必要性を指摘するものである。

Aの釜ヶ崎地域に見られる顕著な点をまとめてみると、

- ① ゲームセンターであそぶ子どもが、幼児と小学生に多く、幼ない時からゲームセンター

をあそび場としなくてはならない現状であること。

- ② 自分の家に自分の場がなく、しかも公園でもあそぶことが出来ない現状であること。子どもたちは、子ども会の各施設を利用してお

り、こども会の設備面・人材面での充実が叫ばれること。

- ③ 中学を卒業した青年たちの為の集いの場、例えば「若衆宿」が必要なこと。
の、3点があげられる。

D. 子どもたちの希望

子どもたちのあそびとあそび場の現状を見て来たが、この現状から子どもたちは、どんなあそびをしたいと思っており、又、どんなあそび場がほしいと思っているのかをアンケートした。

〔1〕「どんなあそびがしたい」

表10の示すように、子どもたちが望むあそ

—表10—

類	あそび	A		B	
		人数	%	人数	%
ス ポ ー ツ 類	野 球	10	27.0	20	21.5
	サッカー	3	8.1	11	11.8
	卓 球	4	10.8	4	4.3
	ドッチボール	1	2.7	4	4.3
	プロレス	1	2.7	1	1.1
	バイクレース	2	5.4	2	2.2
	バスケット	1	2.7	0	0
	スポーツ	1	2.7	2	2.2
	そ の 他〔注1〕	0	0	5	5.4
	合 計	23	62.2	49	52.7
ゲ ー ム 類	ファミコン	7	18.3	10	10.8
	ゲ ー ム	3	8.1	11	11.8
	そ の 他〔注2〕	0	0	2	2.2
合 計	10	27.0	23	24.7	
そ の 他	ごっこあそび〔注3〕	2	5.4	5	5.4
	自然とあそぶ〔注4〕	0	0	7	7.5
	遊園地	2	5.4	2	2.2
そ の 他〔注4〕	0	0	7	7.5	
合 計	4	10.8	21	22.6	
全 合 計	37		93		

びでは、A・B共通のようである。TVゲームを含め、ファミコンをしたい子どもは、A・Bほぼ同値である。スポーツをしたい子どもは、AがBより10%多い。この10%が、Bにその他のあそびで多くなっている。

このアンケートで気になる点は、「どんなあそびがしたいか」という間に、Aは68%の内31名(45.6%)が、Bは157名の内79名(50.3%)と、ABあわせて平均48%と約半数の子どもたちが、答えられなかった

- 〔注1〕 プール (1) パチンコ (1)
ボウリング (1) マージャン (1)
サーフィンヨット (1)
- 〔注2〕 アメリカンフットボール (1)
- 〔注3〕-A ロケットごっこ (1) おにごっこ (1)
〔注3〕-B かくれんぼ (1) おにごっこ (2) ケン玉・おもちゃ (2)
- 〔注4〕 海 (3) いろいろな所へ行ってみたい (2)
〔注5〕 つり (2) どんな事でもやりたい (1)
せみとり (2) みんなで遊びたい (1)
たのしいあそび (1)
なんでもいい (2)

ことである。この点については、後に考察したいと思う。

〔2〕「どんな遊び場所がほしい」

スポーツをしたい子どもたちは、当然広い場所を望んでいる。(表11) 広い場所を望む子どもの年齢構成(表12)を見ると、A・B共小学校高学年が最も多く望んでいる。表8を見比べてみると、Aで小学校低・高学年が一番多く子ども会であるが、Bで同年代の子もたちが多く公園であるのと同じように、Aの子もたちも、公園であそぶことを望んでいることがわかる。特にAの地域に於いて、広い公園という言葉の裏には、金網で囲まれた公園、遊具や植木、椅子等で意図的に広い場所を残していない公園への不満と抗議があることは確かである。また、Aの小学生は「ガラスがなくて、こけても危なくないところ」がほしいと、児童公園であるのにガラスだらけという情けない公園を嘆いている。

— 表 11 —

あそび場所	A		B	
	人数	%	人数	%
広い場所	31	57.4	67	58.8
きれいなところ	7	13.0	2	1.8
おっちゃんのないところ	2	3.7	6	5.3
こどもだけ	5	9.3	5	4.4
プールと遊園地	4	7.4	10	8.8
ゲームセンター	1	1.8	2	1.8
卓球場	1	1.8	0	0
自然の場所	1	1.8	1	0.9
スポーツセンター	0	0	4	3.5
アスレチック	0	0	3	2.6
三角公園	0	0	2	1.8
その他〔注1〕	0	0	10	8.8
公園いらんくさいもん	2	3.7	2	1.8
合計	54		114	

— 表 12 —

	広い場所			
	A		B	
幼児	2	6.5	3	4.5
小学低学年	6	19.4	10	15.0
小学高学年	16	51.6	26	38.8
中学生	1	3.2	22	32.8
青年	6	19.4	6	9.0
合計	31		67	

この項で、特に注目したいのは、次の2点である。

1点目は、「きれいな所」がほしいと望んでいる子どもが、Aでは13%もいるが、Bでは、わずか1.8%である。「こどもだけ」のあそび場がほしいと答えた子どもは、Aでは9.3%もいるが、Bでは4.4%である。合計すると、Aは22.3%、Bは6.2%で、AはBの3.5倍も「きれいでこどもだけがあそべる場」を望んでいる。これは、地域の部の「釜ヶ崎がどんな街になったらいいと思うか」という質問に「きれいな街」と答えているのに通じるものである。

2点目は、「酒のんでるおっちゃんのない所」を望んでいる子どもは、Bでは5.3%だが、Aは3.7%と、Aの方が少ないことである。こどもだけと答える子が9.3%もいるのに、なぜこの質問には、3.7%しかいないのだろうか。

表13は、きれいな所、こどもだけの所、酒のんでるおっちゃんのない所のあそび場を望む子どもの年齢構成を示したものである。

〔注1〕 ただであそべる所・こどもの里・ゴルフ場・自由な所・家の中が広場になったらいい・学校を解放してくれ・動物をさわられる所・バイクであそべる駐車場・プロレスの出来る所・部屋がほしい(各1名)

「酒のんでるおっちゃんのない所」を望む子どもの言葉を拾い上げてみると、Aでは2人だけ。1人は幼児で、「おっちゃんのない広い所」。もう1人は小学生で、「おっちゃんおってもええけど、酒のんでるおっちゃんはいらん」と話している。そして、小学生・中学生・青年には1人も、おっちゃんのない場がほしいと表現した者はいない。このAに対し、Bでは6人

いる。幼児にはおらず、小学低学年に1人、小学高学年に4人、「おっちゃんどこかいけ」、「るんべんのないところ」と表現している。中学生は1人で、「若者だけが集る場所、おっさんがいない場所」と話している。

これは、Bに対し、Aが広い、きれいな公園を望んでいても、労働者を邪魔者扱いにはしていない。つまり、Aの子もたちが、労働者とふれあうことの多い証拠であり、大人との交流があることを現わしている。

要するに、子どもたちは、酔っぱらいや、寝たりするおじさんのないあそび場を望んでいる。それを、きれいな公園・こどもだけの公園と表現していると言っても過言でない。このことは、地域の項(一)の(c)で見た希望と合致している。酔っぱらいや失業者等がいない街であってほしいと答えた7人は、あそび場に、こどもだけ、酒のんでるおじさんのない所と答えた7人と同じである。又、きれいな街であってほしい—4人は、きれいな所がほしい—7人となっている。

つまり、おじさんたちが大勢いることがいやなのでなく、酔っぱらっている状態の人、青カン(野宿)している状態の人がいやなのである。ここで再び、地域の項(三・四・五)を読み返して参考にさせていただきたい。青年になり、彼ら自身の労働体験から、大人の労働についての

— 表 13 —

	きれいな所		子どもだけ		酒のんでるおっちゃんのない所	
	A	B	A	B	A	B
幼児	0	0	1	0	□	0
小学低学年	2	0	1	0	□	△
小学高学年	1	0	2	3	0	△
中学生	4	2	1	2	0	△
青年	0	0	0	0	0	0
合計	7	2	5	5	2	6
合計27名の%	25.9	7.4	18.5	18.5	7.4	22.2

理解は、少しづつ示し始めている。しかし、(五)に書かれているように、子どもたちは、なぜおじさんが酒を飲むのか、なぜ失業しているのかまでは理解出来ない。Aの青年が、「仕事しないから、あそびほうけている人もいる。したくても出来ないという人のいることもわかる。こんな人等には、ちゃんとやったらなアカン」と、アンケートに答えてくれたが、この青年の言葉を耳にする時、なぜ酒を飲むのか、失業しているのか等を、はっきり説明し、正しい知識と理解を深める場—社会教育の場が、ぜひ、必要であることを指摘している。

そして、その学習の場は、釜ヶ崎地域内の子どもたちだけでなく、地域外の子もたち、中んずく大人たちにも必要なものである。というのは、先に紹介した子どもの言葉を見ても、地域外の子もたちは、労働者を邪魔者扱いにする傾向があるからである。1983年、横浜の寿町で起きた少年たちによる日雇労働者虐殺事件は、その代表的事例である。そして、その時報じられた各新聞社の見出しには、「浮浪者」という差別的表現が使われていた。(この実態調査以後、9月には浪速区で、ダンボール回収の仕事をしている労働者に、4・5人の少年たちが火炎ビンを投げ、死亡させた例や、10月には、大阪四天王寺の境内で、エアガンによる野宿労働者襲撃事件などが、あい次いで起こっ

ている。)

これは、大人をはじめとする日雇労働者への無知と、その無知から生まれる差別意識がその根底にある。野宿せざるを得ない日雇労働者の現状は、日本の社会機構の中から生み出されたものであって、決して個人だけの責任から生じたものではない。実は、日本経済と社会を支えている日雇労働者が、無知と差別から、世の中の役に立たないもの、汚いもの、やっかいなものとして扱われ、福祉切捨ての一番の対象となっているように、人が人として生きる当然の権利を奪われてしまっている。こうした大人の差別意識が、子どもたちへ野宿者を襲うという行動を起こさせたのである。このことは、この少年たちが、「汚いものを始末しただけ、大人たちはしからないと思った」と告白しているのをみても証明されている。それ



だけでなく、虐殺事件後2年をふり返って報道されたニュースに横浜の商店主が、日本カモシカの例を上げ、邪魔者は殺すしかないと話していることにも立証されている。

子どもたちは、はからずもこのアンケートを通して、事実を知ることの出来る社会教育の場の必要性和重要性を教えてくれた。

[3] 「将来、どんな仕事がしたい」

最後に、子どもたちは将来どんな仕事に就きたいと思っているのだろうか。表14を参考にさせていただきたい。皆それぞれに、多種多様な

仕事を夢見ているようである。

特筆すれば、Aの青年が、「土方はしたくない」という希望を述べているが、この青年の話しをよく聞いてみると、彼の父親が日雇いの仕事をしており、彼は、そのことによる生活の不安定さから定職を希望しているのである。

Bの05地域に、「親父みたいになりたくない。あんなに働いても、もうからないから」というのがあるが、彼は、幼少より両親に連れられ飯場を転々とし、しばらく釜ヶ崎で生活していたが、05地域の市営住宅に転居していった子どもである。

Dの〔1〕で、「どんなあそびがしたいか」という質問に、半数の子どもたちが答えられなかったが、この項目でも、Aは25名-37.3%、Bは74名-46.3%と、平均43.6%の子どもたちが答えていない。これは、子どもたちの生活の中で、「今日、何をしてあそぶか」という課題が、その子の主体性を

確立する上に重要な位置をしめていることの証しである。それにしても、A地域の子どもたちが、B地域の子どもたちより、10%近く多く将来に対する仕事を胸に抱いていることに注目していただきたい。

以上、Dの項のアンケートを整理・考察して来たが、子どもたちの生活を、みんなで守り合い、補い合い、助け合う大人との関わりの中で、子どもの生活権を保障する場、あそびを保障する場、教育権を保障する場が必要だと、子どもたちは教えてくれている。

—表 14—

D ₃ 将来どんな仕事	01	02	03	04	05	19	99	Total
野球選手	7	1	4	4	2	0	0	18
トラッククンの運転手	1	2	1	2	2	0	0	8
教師・保母	1	1	1	2	2	1	0	8
サッカー選手	2	0	1	1	0	1	0	5
警察官	1	0	2	1	1	0	0	5
レスラー	1	1 (ラーマン)	2 (おばや、すしや)	1	0	0	0	5
ジュース・おかし屋	4	0	0	0	0	0	0	4
サラリーマン(トヨタ)	1	1	1	0	0	1	0	4
喫茶店	1	1	1	1	0	0	0	4
ペット・ショップ	1	1	1	1	0	0	0	4
コマデアイアン	1	0	2					3
電車の運転手	1	1	0	0	1	0	0	3
塗装	1	0	2					3
卓球選手	2				1			3
まんが家	1		1	1	1			3
建築(大工)	1		1					2
おもちや屋	2							2
家事手伝い		1		1				2
パチンコ店員				1	1			2
	土方はしたくない 看護婦 ワゴン屋 パズル屋 機械関係の仕事 歌手 コムポートをつくる 漁師 消防士 花火屋 カメラマン テレビタレント	はじめは仕事 自分で人形をつ くって売る 勉強したい 溶接工 土方 アラモモデル設計	電気屋 文具店 音楽バンド 花屋 コック	やくざ 金持ちになりた い お父さんがやっ ている夜勤の仕事	パイロット 公務員 美容師 銀行員 印刷 鉄工所 らくなこと、自分 のすきなこと 自衛隊の幹部 なにもしたくない 親父が嫌いになり たくない。 ※ 10	本屋 肉屋 やきパン屋 家をつぐ かわいなお嫁 さん		1人づつ 41
無回答	25	9	33	15	11	4	2	99
Total	67	25	57	33	32	11	2	227

※ あんなに働いてももうからないから。